

或鷹鳥書は後
 京極殿の御を
 出でてうゝをハ
 我とも又ハあ
 柴とも云其系
 依べしとてハ
 君よとてあな
 生るうとれと
 存不斷けさ
 應うひあれ
 故とてあ
 と語せし又さ
 柴の長が
 くりくゆ

五穀をわしにきと征し給ひ万民を助けあふ君中もさうれと
 云意とさあ給ひハ明解集べしとく上ノ句を序の中
 人ハ萬民君ハ明王とて前より鷹とさうくつと云解ハ
 わくさるべし

くれとけしとの雄をわしとれとさうくの枝よつあま
 ちとてハ鳥柴とくさうくさるハ必ちハ木の枝ハ附しやそれと
 ち柴とゆふれてけきとけしとてハちの年の冠辞あふと
 後中春中の冠らせし又あふ鷹とはさの意とさうと
 ちと唯此とれとくさうくさるハさあねるはさの柴ハ
 さうくの枝とせむとさうのさの柴はゆれどもさうや乃やと